



IC³ アイシースリー

活用事例

京都光華女子大学 IC³(アイシースリー)に準拠したeラーニング授業を展開 「大学コンソーシアム京都」にも配信を開始

情報教育への積極的な取り組みと、学生の意志・個性を重視した教育で知られる京都光華女子大学。同大学は、2002年に日本でIC³(アイシースリー)という資格試験が実施されて間もない2004年度に、すでにその内容に対応した科目を導入し、さらにその後はその講義を学内外にeラーニングで配信するなど、情報教育の先進校にふさわしい大胆な取り組みを続けています。

2004年度当時から、大学内でのIC³の活用に意欲的に取り組まれているキャリア形成学部の阿部一晴准教授にお話をうかがいました。

情報教育の先進校として 日本でIC³が開始された最初期から導入

京都市右京区にある京都光華女子大学は、1940年設立の光華高等女学校を前身として64年に開学。現在では、幼稚園、小学校、中学校、高等学校を併設する真宗大谷派(東本願寺)宗門の総合学園となっています。同大学は、さまざまな先進的な取り組みを積極的に行うことでも知られており、京都にある国公私立の大学・短大、地域社会・行政、産業界が連携して各事業に取り組む「大学コンソーシアム京都」^{*1}の前身にあたる「京都・大学センター」の1994年発足時メンバーとして参画。また、20年以上前から全学横断組織として情報教育センターを設置し、学生全員にメールアドレスを配布するなど、情報リテラシー教育と情報技術の教育への活用の両面において、早くから活発な活動を行ってきました。

2004年にはその一環として、人間関係学部メディア情報専攻に「コンピュータ基礎」(前期)および「ネットワーク基礎」(後期)が設置され、当時、日本で開始されて間もないIC³の「コンピューティング ファundamentals」「リビング オンライン」の2科目の全試験範囲を網羅した内容でのカリキュラムが開講されました。これについて、大学内でのIC³の活用に取り組まれたキャリア形成学部(当時、情報教育センター所属)の阿部一晴准教授は次のように語ります。「もともと本学の情報系科目は歴史が長く、パソコン教育などもその他の大学に先駆けて導入していましたが、当時はもっぱらアプリケーションの操作が中心でした。そういった使い方中心のスキル習得だけでは、例えばパソコンを使っていてトラブルが起きて何が原因かわからないままだったり、あるいは知識がないがゆえにトラブルに巻き込まれたりすることもあります。そこで、今後ますますIT化が進む時代を生きる若

者にこそ、コンピュータやインターネットがどのように動き、機能しているのかという原理的な仕組みを補強していく必要性を感じていました」

2003年、阿部先生は従来あったコンピュータの応用的な使い方を教える一般教養の実習科目「情報処理」に加え、より原理的な部分を学ぶ科目をつくることを提唱。さらに、そうした学習の達成度合いを適切に評価できる枠組みとしてIC³に着目しました。

「IC³のことを知って最初に思ったのは、学生が社会に出たときに必要とされる、デジタルリテラシーを身につけるための内容がバランス良く構成されている資格試験だということでした。コンピュータそのものの知識、ネットワークの知識、アプリケーション操作の3つの領域に分かれていて、それらを個別に評価することができる。加えて、この資格がデジタルリテラシー習得の客観的な到達評価基準として、世界的に実績^{*2}のある点にも注目しました。大学としては、IC³の取得を義務づけてはいませんが、私の授業は基本的にIC³の内容に沿っていますので、学期末には『せっかくここまで勉強したのだから、IC³を受けて本当に実力がついたかどうかを試してみよう』と学生には話しています。大学では、全授業の受講終了から成績処理までに少し時間があり、その間に学内でIC³の試験を受けることができます^{*3}ので、受験後の結果については成績にも反映しています」(阿部先生)

教室講義からeラーニングへ授業形態を転換 学外にも講義を配信

2013年の4月より、京都光華女子大学でのIC³関連の授業は、全学部を対象にすべてeラーニングで実施されていますが、カリキュラム設立当初は、教室での講義という形態で行われていました。しかし、大人数での講義では、ともし

京都光華女子大学 <http://www.koka.ac.jp/>

所在地 京都府京都市右京区西京極葛野町 38
 学生数 約 1,800 人

1940年、光華高等女学校として設立。一人ひとりの学生の学ぶ意欲に応じた多様なコースを用意し、情報教育や就職指導にも力を入れている。キャリア形成学部キャリア形成学科は社会の要請に応える多彩なカリキュラムを用意し、IT関連をはじめ、幅広い分野で活躍する人材の育成に努めている。

取材ご協力



京都光華女子大学
 キャリア形成学部
 准教授
 阿部 一晴 先生

れば受動的な「聞くだけ」の態度に学生が陥りがちであったと言います。

「ある時期、eラーニングと教室での通常授業を並行して実施したことがありまして、それで同じ期末試験を受けさせたところ、eラーニングのほうがテストの結果が良かったのです。それを見て教室の授業をやめ、すべてをeラーニングに切り替えました」(阿部先生)

事実、視聴パターン追跡や質問用掲示板などのeラーニングならではのきめ細かい1対1のサポート体制は、学生一人ひとりを講義の内容に能動的に参加させることにとっても効果的だったとのこと。また、Wordを使った講義ノート提出や掲示板への書き込みなど、授業を受けること自体が授業で学ぶことの実践になっている点においても、eラーニングという学び方とIC³に準拠したコンピュータ教育はうまく適合したと言えます。

IC³関連授業以外に、学内でのeラーニングは6～7年の歴史がありますが、さらに2013年度からは「大学コンソーシアム京都」が運営するeラーニングシステムの「e京都ラーニング」にも配信を開始。「大学コンソーシアム京都」の活動のひとつは、京都にある国公立の各大学や短大間での科目履修のネットワーク化も含まれるため、このシステムに参加する、約50の大学・短大からも「コンピュータ基礎」および「ネットワーク基礎」を履修・単位取得することが可能になりました。

「e京都ラーニング」では、期末試験の代わりにレポート提出を課すなど、完全に非対面であることを前提とした若干の授業プランの変更はなされているものの、基本的には学内のeラーニングで提供しているものとまったく同じ講義がほかの大学からも視聴できるようになっています。「大学コンソーシアム京都の単位互換制度のなかにeラーニングを取り込むという話が5年ほど前に出てきて、本学はそれに先行して取り組む中核メンバーになりました。他大学に本学の講義を提供する際に、ユニークかつeラーニングの特色が出せるような科目を、と考え、せっかく学内でIC³を意識したデジタルリテラシーの講義をやっているのだから、それを活用しようということになったのです」(阿部先生)

大学教育におけるIC³の意義 キャリアアップの道筋の一助となる成功体験

学生の就職活動をサポートするキャリアセンターにおいても、秘書検定や色彩検定などの資

格と並んで、マイクロソフト オフィス スペシャリスト(MOS)とITパスポート、そしてIC³という情報系3検定を推奨資格としている京都光華女子大学。しかし、阿部先生にとって大学教育にIC³を取り入れることの意義は、単に学生のスキルアップや就職に向けた資格取得にとどまらないと言います。

「eラーニングという形態により、学生は履修時間を自分で選択でき、教える側は一人ひとりの履修の進捗状況や理解度を細かく把握してきます。掲示板にランダムに入ってくる、60名を超える学生からの質問に対してすべて個別にコメントしていくので手数はかかりますが、やり取りを重ねただけ理解度が深まっていくことを学生自身が自覚しているようです。その結果として「IC³取得」という流れとしているわけですが、IC³はきちんと勉強すれば受かる試験なので、学生自身が頑張っ合格したこと自体が自信になっている部分も大きいと思います」と、実際に取り組み、結果を体感することの大切さを指摘します。

そこには、「まじめに勉強すれば、合格という目標を達成できる、資格取得という成果を得られる」といった成功体験を、学生時代にひとつでも多く経験させたいという阿部先生の想いがあります。そしてその経験を次へのバネにしつつ、より専門的な上級資格や社会人になってからの挑戦意欲などへと道筋をつけることが、キャリアアップのためにはとても大事だと考えているそうです。「自分がやっていることの原理的な部分を知る機会がなかった本学の学生に、IC³の存在やそれをベースにして次に挑戦してほしいというこちらの意図はすごく響いてくれました。さらに、IC³を受験した学生からは『挑戦して良かった』『IC³がカバーしている内容をやっておくと、これから役立つと思う』と言ってもらえて、本人のさらなる意欲にもつなげることができました」(阿部先生)

京都光華女子大学がIC³を取り入れてからおよそ10年。キャリア形成にとどまらず、学生自身のさらなる学ぶ意欲を引き出すうえでもIC³は大きな役割を果たしています。

※1 教育研究のさらなる向上と成果を、地域社会や産業界に還元することを目的として発足された公益財団法人。本団体が、全国の大学連携組織の先駆け

※2 CompTIA(コンピュータ技術産業協会)やACE(アメリカ教育協議会)など、9つの産・官・学の国際団体から推奨を受け、世界110か国以上で実施されている。

※3 教育機関が一定の条件を満たしたうえで試験会場として登録すれば、在学生は校内にあるコンピュータを利用してIC³を受験できる。